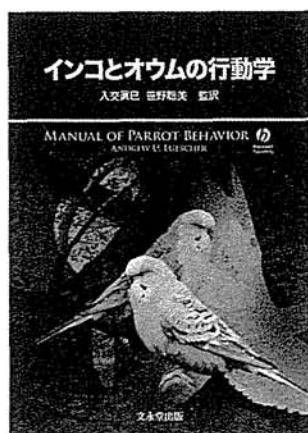


書 評



## 書評『インコとオウムの行動学』

入交眞巳，笹野聡美 監訳

2014年1月発行・B5判・406頁

定価 17,280円（税込）文永堂出版

浅川 満彦

酪農学園大学獣医学群

2006年に刊行された『Manual of Parrot Behavior』（Andrew U. Luescher米パデュー大学ほか32名が執筆）が監訳者を含めた5名の行動学に造詣が深い方々が翻訳された。本書は次のような27本の論文で構成されていた（各章略題を記す）：分類学的位置／野生ボウシインコ属・ハシブトインコ属の行動特性とおよび他属との比較／保護，商取引，再導入／知覚的能力／社会行動学／飼育栄養学－解剖学，生理学，行動学との関係／安心行動と睡眠／繁殖行動，誰が関与・交尾・世話をするのか／巣箱の好み／人工育雛－飼育種の福祉における行動上の影響と示唆／飼育種の行動学的発達－初生雛，巣内雛，巣立ち雛／飼育者の姿勢および雛の発達／ヨウムの認知力とコミュニケーション／行動分析と学習／動物病院における行動学級（評者注：いわゆる「しつけ教室」の事）－問題行動を予防するために／問題行動の臨床評価／問題行動が窺われる場合の診断的精密検査／愛玩鳥の攻撃行動／発声／恐怖／伴侶動物として飼われている種の問題性行動／つがいの相手による外傷／飼い鳥における毛引き症／行動薬理学／繁殖舎における飼育種の行動／問題行動を防ぐための飼育舎と飼育管理に関する考察／飼育下のアニマル・ウェルフェア。

本研究会各位にとって、無論、日々の診療業務や顧客への適切な飼育指導などにとって有益な手引きあるいは資料集となるのは間違いないであろう。しかし、野生種の進化や生態、保全に関わる基礎的な情報もしっかりしており、知的興奮も満たされるであろうし、動物商の方々は来客者への説明責任を果

たす上でも、重要なネタ満載である。野生動物医学を専門とする評者にとって、教育・啓発上、非常に悩ましいことのひとつが、遺棄された動物（に由来する外来種含む）の安楽死あるいは遺棄への対応であるが、その原因が問題行動（p189、p299など）であるという。よって、その上流にある行動学の進展は大歓迎であり、実際、獣医行動学は獣医学コア・カリキュラムの中に位置付けられている。しかし、学問上の新知見の蓄積度合いは、分子系統解析やアニマル・ウェルフェアの分野とともに、日進月歩的である。そのため、オリジナルの発行から10年近くたった今日、読者ご自身によるアップ・デートをするための努力が必要である。特に、このようなタイムラグ的なところは、本書末尾に近い8ページ分に掲載された口絵写真の多くが何となく懐かしい雰囲気漂っていた。しかし、貴重なことは疑いの余地は無い。ところで、問題行動が、性成熟が社会的成熟に先んじてやってくることが原因で、ヒトのティーン・エイジャーに例えられていたのは（p325）－専門の方には常識なのだろうが、眼から鱗であった。オウム・インコ類は鳥界の類人猿なのだそう（p3）何となくヒトくさい。評者の鳥類学講義で引用したいものが随所に散りばめられ、わくわくしながら新年度授業の準備をしつつ、この書評を書いている自分に気が付いた。現役獣医学徒は、行動治療と言え、犬のみのための実学分野と刷り込まれてしまっているようだが、本書を参考書に、実はオウム・インコ類でも大切なんだよと、是非とも、喧伝したい。